

社会科の基礎・基本を定着させるための指導と評価

調べて考える力を育てる、分かる授業づくり

社会科研究会議

武井 信一¹

小林 勝弘²

南谷 隆行³

藤田 和也⁴

要 約

現行の学習指導要領が実施されて2年近く経過し、すべての子どもたちに新しい学力観に基づく、基礎・基本を定着させる必要がある。そのためには、学習指導要領から社会科の基礎・基本を明確にした上で、社会科学習の中心となる問題解決学習を通して、調べて考える力を育成するための単元構成を行い、子どもたちに分かる授業を工夫し、評価によって子どもたちの学習状況を的確に把握した上で、授業に生かすことが必要である。そこで実際に小・中学校の単元開発を行い、検証授業を実施し、基礎・基本の定着に必要な条件を明らかにした。その結果、基礎・基本を意識した単元構成が必要であること、資料と発問の吟味が必要であること、調べて考える活動によって「分かる授業」になること、子どもたちが書く作業が重要であること、単元目標の実現状況について評価を実施することが有効であることが明らかになった。

キーワード：社会科、基礎・基本、問題解決学習、評価、考える力、分かる授業

目 次

| | | | |
|-------------------|-----|--------------------|-----|
| 主題設定の理由 | 106 | 4 社会科の基礎・基本とは何か | 110 |
| 1 学習指導要領から | 106 | 5 調べて考える力を身に付けるために | 112 |
| 2 川崎市総合教育センターの | | 6 調べて考えることと分かる授業 | 113 |
| 総括主題から | 106 | 7 授業の実際と考察 | 113 |
| 3 子どもたちの実態から | 107 | 研究のまとめ | 118 |
| 4 社会科学習に求められていること | 107 | 1 考察 | 118 |
| 研究の内容 | 108 | 2 今後の課題 | 119 |
| 1 研究の仮説 | 108 | 参考文献 | 120 |
| 2 研究の方法 | 108 | 指導助言者 | 120 |
| 3 学力構造から教科の基礎・基本を | | | |
| どうとらえるか | 109 | | |

¹ 川崎市立菅生中学校教諭（長期研修員）

² 川崎市立宮前小学校教諭（研修員）

³ 川崎市立稲田小学校教諭（研修員）

⁴ 川崎市立川崎中学校教諭（研修員）

主題設定の理由

1 学習指導要領から

21世紀を迎えた我が国の社会は、国際化、情報化、科学技術の発展、環境問題の高まり、少子・高齢化等の様々な面で大きく変化してきており、これらを踏まえた新しい時代の教育の在り方が問われている。そのような背景の下に、平成8年7月の中央教育審議会第一次答申においては、これからの学校教育の在り方として、自ら学び、自ら考える力などの「生きる力」の育成を基本とし、教育内容の厳選と基礎・基本の徹底を図ることなどが提言された。

これを受けて、平成10年7月に教育課程審議会において、児童生徒の実態、教育課程実施の状況、社会の変化などを踏まえつつ、児童生徒に「生きる力」を育成することを基本的なねらいとして、「自ら学び、自ら考える力を育成する」こと、「ゆとりある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実する」ことなどが提言された。

これをもとに社会科改善の基本方針が示され、「児童が社会的事象に関心をもって進んでかかわり、それらの意味や働きを多面的に考えるとともに、児童生徒の発達段階を考慮して社会的事象を公正に考えたり、判断したりできるようにすること」が一層求められている。また、地域社会や我が国の産業、国土、歴史などに対する理解を深め愛情を育てるようにすることを重視し、日本人としての自覚をもち、国際理解を深めることや、我が国が国際社会で果たしている役割について理解できるようにすることを目指している。そのためには、従来の網羅的で知識偏重の学習ではなく、学習者自らが学び方や調べ方を身に付ける学習や体験的な学習、問題解決学習を一層重視することとしている。つまり社会の出来事や事柄、地名や年号などの細かな知識を覚える授業から、児童生徒一人一人が観察・調査、体験、表現などの具体的な活動を通して、社会的事象の意味や働きなどを考えたり、自分の意見を述べたりする授業の改善が求められている。

小学校社会科では、児童が地域社会や我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を一層深めるとともに、世界の人々と共に生きていくことが大切であることを自覚させ、学び方の視点から、社会的事象に関心をもち、公正に判断できるように、各学年の発達段階に応じて観察、調査したり、各種の資料を活用したり、調べたことを表現したりすることが重要である。そのために、社会的事象の意味や働きなどを考える力を育てることを重視した目標の改善が図られた。

また中学校では、地理的分野、歴史的分野、公民的分野で構成されている従前の基本的枠組は維持しながら、知識偏重の学習にならないよう留意し、広い視野に立って我が国の国土や歴史、社会生活を成り立たせている政治や経済などに関する理解を深めるとともに、生徒の特性等に応じて主体的な学習が展開できるようにすることを重視している。

2 川崎市総合教育センターの総括主題から

川崎市総合教育センターの総括主題である「川崎の特色が生きる教育の創造」からは、子どもたちの実態や地域性をとらえ、それを生かした教育活動を展開していくこと、つまり地域を学ぶ学習ではなく、地域から学ぶ学習の重要性が指摘されている。学校と地域社会との連携を深めるという視点から、地域に根ざした教育活動を展開し、そのために、地域の特色を生かした学習を構想したり、地域に住む人々との出会い、ふれあいを教育活動に取り入れたいことが求められている。また、それらを実現させるための「自ら学ぶ」「共に学ぶ」「学び続ける」の三つのキーワードを本研究会議では以下のようにとらえた。

「自ら学ぶ」とは、子どもたちが主体的に学習することであり、そのためには、子どもたちに学ぶ

ことの楽しさや喜びを感じさせる必要がある。また、子どもたちを主体的な学習者に育てるためには、社会事象に対する興味・関心の中から問題を見だし、問題解決学習を实践し、学び方を学ぶ学習を通して生活と関連付けていくことが必要である。

「共に学ぶ」ということは、学習は、単に知識を獲得するだけの行為ではなく、その過程を通して、他者と協調したり他者の良さを認めたりする気持ちをはぐくむことである。調べて考える活動を通して、他者の考えを知り、それによって自分自身の考えを作り、社会に参加して行くことが期待される。

「学び続ける」ということは、学校を卒業するとともに学びが終了するのではなく、人は生き続ける限り、あらゆる場で学び続ける存在である。社会的な事象の中で、他者とのかかわりや、問題を考え続けることによって、より良い生き方を求め、自己啓発をしていく力を身に付ける必要がある。

3 子どもたちの実態から

子どもたちの社会科学習をめぐる状況として、平成14年2月の「平成13年度小中学校教育課程実施状況調査報告書」(国立教育政策研究所)の質問紙調査の結果によると、「社会科の勉強は好きか」という質問に対して、図1のように「そう思う、どちらかというと思う」と回答した者の合計が約5割である。

また、「社会科の勉強は大切か」という質問に対して図2のように「そう思う、どちらかというと思う」と回答した者の合計は約8割である。これは、将来の生活に役立つので、「大切だ」と答えていると考えられる。

さらに「社会科の授業はどの程度分かるか」の質問に対して、図3のように「よく分かる、だいたい分かる」と答えた者の合計は約5割で、「分かることと分からないことが半分くらいずつある」は3割弱、「分からないことが多い、ほとんど分からない」と答えた者の合計は、2割弱であった。

これらの調査結果から、子どもたちの約8割が社会科の学習が大切だと考えながらも、授業が「分からない」と回答している小学生が約1割、中学生が約2割程度、また「分かることと、分からないことが半分くらいずつある」という子どもたちが小中学校ともに約3割程度いることが明らかになった。このことから社会科学習指導における「社会認識を深める」手だてを工夫・改善していくことが求められている。

4 社会科学習に求められていること

学習指導要領が実施されて2年近く経過し、すべての子どもたちに基礎・基本を定着させることが

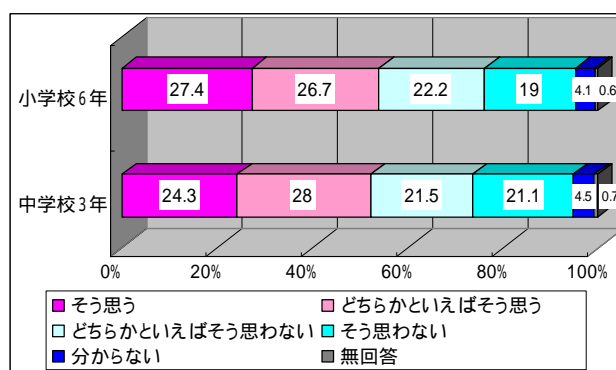


図1 社会科の勉強は好きか

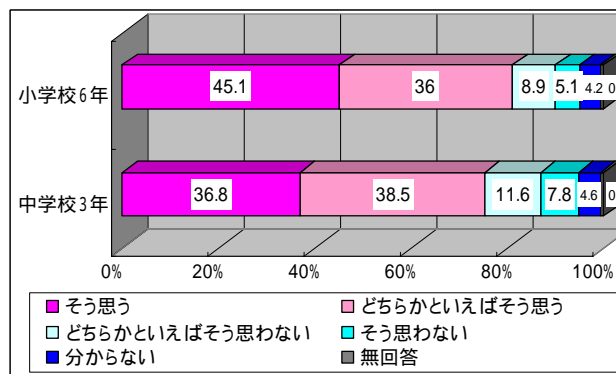


図2 社会科の勉強は大切か

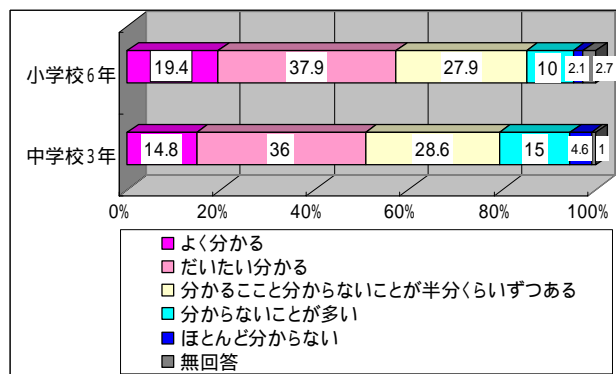


図3 社会科の授業はどの程度分かるか

課題となっている。すべての子どもたちに基礎・基本を定着させるためには、新しい学力観に基づく、子どもたちに分かる授業の在り方を検討し、教材を厳選して教材開発を行い、単元構成を工夫する必要がある。また、基礎・基本が確実に定着しているかを客観的に見取り、評価をもとにした授業改善を行うことが必要である。

前述の「平成 13 年度小中学校教育課程実施状況調査報告書」によると、教科ごとの対象学年における学習指導要領の目標、内容に照らした学習の実現状況については、全体としてみれば、おおむね良好とされている。

一方で、同書の子どもたちに対する質問紙調査の結果によると、約半数近くの子どもたちが、分からないところがあるという結果がでている。そのことから、子どもたちに「分かる授業」を行うことが、より確実な基礎・基本の定着につながると考えた。なお、本研究会議で言う「分かる授業」とは、子どもたちにとって分かる授業であり、子どもたちが主体的に学習し、自ら学び取る授業であり、子どもたちにとって理解しやすい授業のことである。

また社会科学習の中心となる活動は、自ら調べ考える力を育てることによって、公民的資質の基礎を養うことであるので、次のような研究主題を設定した。

研究主題

社会科の基礎・基本を定着させるための指導と評価

- 調べて考える力を育てる、分かる授業づくり -

研究の内容

1 研究の仮説

子どもたちに社会科の基礎・基本を確実に定着させるためには、まず社会科における基礎・基本とは何かを明確にする必要がある。また、社会科の基礎・基本について考える際には、学習指導要領に示された目標を「理解」、「態度」、「能力」の三項目に分けて分析し、社会科における学習の中心的な活動である、自ら調べて考える活動に着目して授業を構成し、新しい学力観に基づく、基礎・基本を定着させるための、分かる授業の在り方について検証する必要がある。そこで次のような仮説を設定した。

仮説 社会科の基礎・基本を明確にし、自ら調べて考える力を育てる単元構成をして、分かる授業を展開し、教師が子どもたちの学習状況を的確に把握して授業に生かすことで、子どもたちに基礎・基本を定着させることができるであろう。

子どもたちの学習状況を的確に把握するための評価方法について検討し、それを生かして授業改善をしていくことで、子どもたちに基礎・基本を定着させることができるのではないかと考えた。

2 研究の方法

(1) 文献、先行研究から研究主題にかかわる資料収集

「社会科の基礎・基本」や、「調べて考える力を育てること」「分かる授業」について探る。

(2) 社会科における基礎・基本の明確化

単元事例における社会科の基礎・基本を学習指導要領の「理解」、「態度」、「能力」の三項目からとらえて明確化し、調べて考える力の育成に重点を置き、学習目標を設定し、子どもたちに分かる授業を展開する。

(3) 基礎・基本を定着させるための単元構成の工夫

学習指導要領から、基礎・基本を定着させるために工夫をした学習単元づくりを行った。その際に、

子どもたちが学習目標を実現するために、どんな資料を使って何について調べ、何について考えるのかについて十分に吟味した上で、教材の厳選を行った。また、毎時間ごとの授業における子どもたちの学習状況を把握するための手だてとして、発言やノート等の記述の読みとり、学習単元終了後に学習目標が実現されたかどうかを見極めるための問題等を活用した評価について検討した。

また、観点別評価によって、学習目標に到達することができたかどうかについて分析を行ったが、その際に「C」の評価となる可能性のある子どもに対して、どのような指導をすれば「B」の評価となるのかについての手だてを明確にした上で授業を行った。

(4) 検証授業の実施と授業分析

小学校における検証授業 9月26日 6学年 歴史単元 「旧東海道を歩こう」

中学校における検証授業 11月6日 1学年 地理的分野「私たちの町、川崎区の変ぼうを探ろう」

授業分析

基礎・基本の定着を重視する単元構成をすることにより確実に基礎・基本が身に付いたのかどうかを、事前に観点別評価で「A」・「B」・「C」のそれぞれの状況にあると予想される3名の着目児童生徒を中心に観察することによって授業分析を行った。

(5) 検証の方法について

授業の検証については、授業観察による子どもたちの発言の記録、ワークシート、ノートの記述などを分析することによって、授業の目標を実現したかどうかをみた。その際には、授業の最初や中間の段階では発言から興味や関心の程度を、まとめの段階ではノートの記述から思考の深まりについて分析を行った。まとめの段階のノートへの記述は、子どもたちが自分で調べて分かったこと、考えたことを各自200字程度にまとめてから発表した。さらに友達の考えを聞くことによって、友達の考えのどのような点が良かったのかを評価させた。また単元終了時には、友達の考えや意見を聞いて、自分の考えがどのように変わったのか、あるいは変わらなかったのかについても、自己評価を行った。

このような人々とのかかわりの中で学ぶことによって、社会的な価値判断や公民的資質、能力が形成されると考えられる。また、子どもたち自らが獲得した知識によって、次の学習につながる積み重ねの学習になり、過去から現在を通して未来を学ぶ学習になるのではないかと考える。

また単元の最後では、観点別評価に配慮した学習の振り返りによる評価を行った。これらの結果を総合的に判断して、学習目標が実現できたかを見取り、次の単元に役立てた。

(6) 評価を生かした授業づくり

授業に対する子どもたちの自己評価や、教師による授業中の子どもたちの観察、ノート等の記述による見取り、学習単元終了後に学習目標が実現できたかどうかを見極めるための問題等も活用しながら、再度授業の見直しを行い、他の単元の授業を行う際に役立てることができるようにした。

3 学力構造から教科の基礎・基本をどうとらえるか

本研究会議では、教科の基礎・基本を図4の佐島群巳による「学力構造図」¹⁾でとらえることにした。社会科における基礎・基本は、読書算や、感性(直接体験)に裏付けされた、内容知としての「概括力」(まとめ、つなげ、関連付けること)である。つまり、認識形成をすることによって社会認識(年代や地域区分など)を深めることである。それらを学習活動の中で「まとめ」「つなげる」ことによって関連付け、「概念化」する。「概括力」はさらに次の段階で、知識と実践を結合した「知の総合化」が行われ、社会科としての「実践力」であり、究極的な目標である「公民的資質の基礎」となる。つ

¹⁾ 佐島群巳「平成14年度公開研究発表会 教員研究発表要旨集」帝京中学・高等学校 2003年 p.8

まり、図4の三層が有機的に機能して初めて学力が「生きる力」として人間形成に寄与することになる。

次に社会科の学習構造はどのようなになるか、右の図5「社会科学習構造図」で示した。図中の「認識形成」は、対象内関係把握や客観的認識、事実的関係把握などの社会認識を深めること

であり、社会科学習の中心となるものである。また、「価値形成」とは倫理につながる価値観の形成であり、それは日常的な内面化され習慣化された価値決定である。つまり、「国際社会に生きる公民的資質、能力」と言える。この二つを融合していく中で「自己形成」していくことがすなわち人間形成である。

次に社会科学習の方法として、問題解決学習があるが、その構造を示すと右の図6「問題解決学習構造図」のようになる。社会科において、問題解決学習の中では、体験学習（社会的体験活動）探究学習（調査活動）参加学習（社会参加活動）があり、それぞれの学習活動の中で、「つかむ、調べる、考える、まとめる、判断する」の各段階の思考過程がある。特に参加学習では人々とのかかわりの中で学ぶことにより、自らの変容とともに、他者の変容も期待することができ、相互作用がもたらされる。相手に共鳴し

感動することが人間形成で重要なことである。

4 社会科の基礎・基本とは何か

本研究会議では、社会科の基礎・基本を学習指導要領で示された目標を「理解」、「態度」、「能力」の三つの項目からとらえた。小・中学校の社会科の学習指導要領の目標を見たとき、「我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め」、「国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」の二つが共通のねらいであり、この二つが小・中学校における社会科

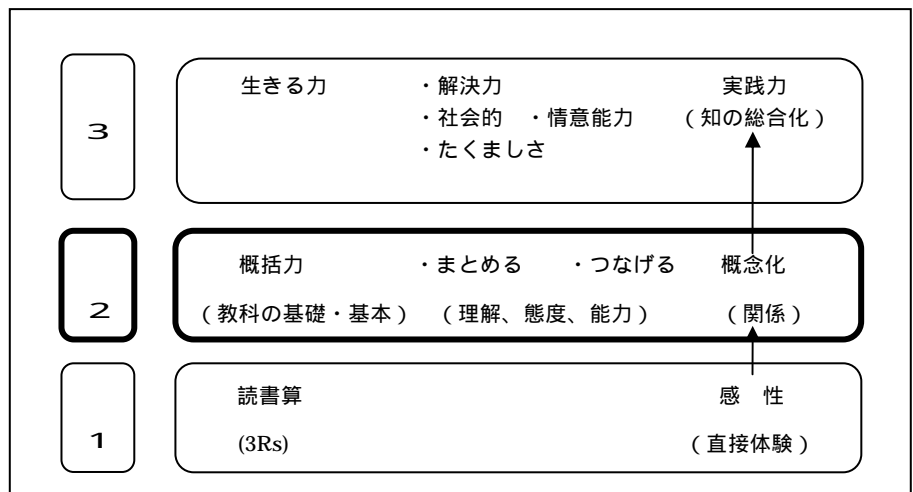


図4 学力構造図

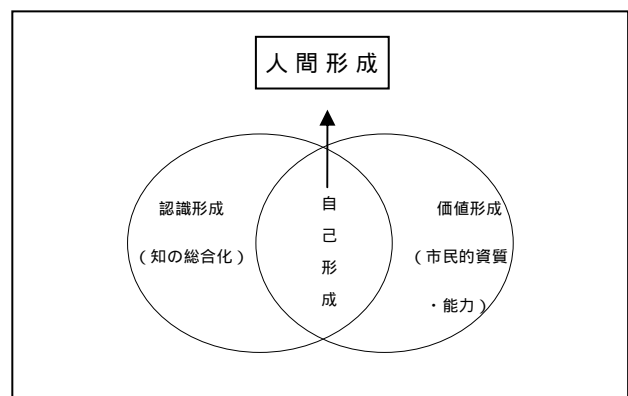


図5 社会科学習構造図

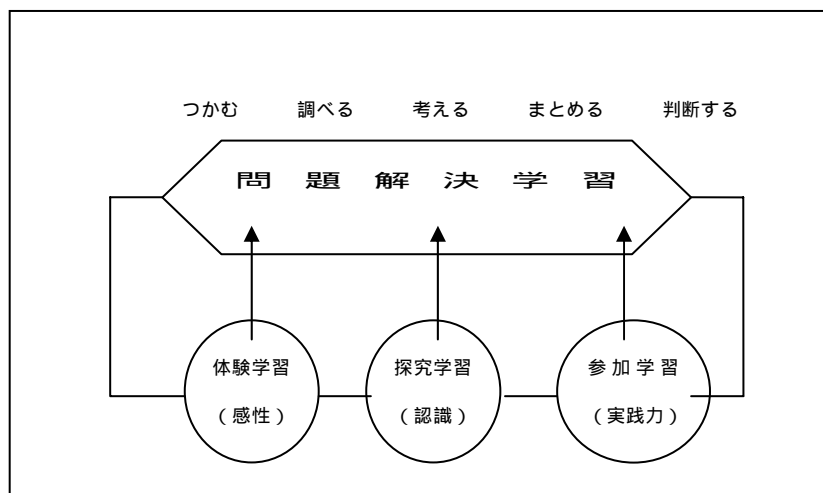


図6 問題解決学習構造図

の学習が目指す究極的なねらいである。

社会科の学習では、社会生活についての理解を深め、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育てることを通して、国家・社会の形成者として、その発展に尽くそうとする態度や能力を育てようとしている。社会科の究極的なねらいである公民的資質の基礎を養い、民主的、平和的な国家・社会の形成者としてふさわしい市民・国民を育てるためには各学年に示されている「理解」、「態度」、「能力」に関する目標を統一的に身に付けるようにすることが重要である。そこで学習指導要領の各学年の目標、内容から、その単元でおさえたい基礎・基本として、「理解」、「態度」、「能力」の三項目について明確にしたうえで単元目標をつくり、単元の指導と評価の計画を作成した。

次に、授業における学習目標と評価の関連を図ることが重要である。学習指導要領に示された四つの観点別評価項目である「社会的事象への関心・意欲・態度」「社会的な思考・判断」「観察・資料活用」の技能・表現」「社会的事象についての知識・理解」は、社会科の基礎・基本に対応するものなので、四つの観点にしたがって評価規準を設定するとともに、評価方法を工夫して、子どもたちの学習状況を把握し、それを授業改善に役立てた。

(1)「理解」に関する基礎・基本

小学校学習指導要領の教科の目標では、社会科における理解目標として、「社会生活についての理解」と「我が国の国土と歴史に対する理解」を挙げている。また、中学校学習指導要領でも、「我が国の国土と歴史に対する理解」を挙げている。そして具体的には、各学年、領域における目標として示している。ただし、ここで言う理解とは、単なる教えられた知識を理解することではなく、子どもたち自らが主体的に獲得する知識ということである。

表1 中学校の各分野における理解目標

| 学 年 | 目 標 |
|-----|---|
| 3・4 | ・地域の産業や消費生活の様子、人々の健康な生活や安全を守るための諸活動について理解できるようにする ・地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにする |
| 5 | ・我が国の産業の様子、産業と国民生活との関連について理解できるようにする ・我が国の国土の様子について理解できるようにする |
| 6 | ・国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について、興味・関心と理解を深めるようにする ・日常生活における政治の働きと我が国の政治の考え方及び我が国と関係の深い国の生活や国際社会における我が国の役割を理解できるようにする |

表2 中学校の各分野における理解目標

| 分 野 | 目 標 |
|-----|---|
| 地 理 | ・我が国の国土の地域的特色を考察し理解させる |
| 歴 史 | ・我が国の歴史の大きな流れと各時代の特色を世界の歴史を背景に理解させる ・国家・社会及び文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を、その時代や地域との関連において理解させる ・歴史に見られる国際関係や文化交流のあらましを理解させる |
| 公 民 | ・個人の尊厳と人権尊重の意義、特に自由・権利と責任・義務の関係を広い視野から正しく認識させ、民主主義に関する理解を深める ・民主政治の意義、国民生活の向上と経済活動とかかわり及び現代の社会生活などについて、個人と社会とのかかわりを中心に理解を深める |

(2)「態度」に関する基礎・基本

学習指導要領では、各学年及び各領域における態度目標が次のように示されている。

表3 小学校の各学年における態度目標

| 学 年 | 目 標 |
|-----|--|
| 3・4 | ・地域社会の一員としての自覚をもつようにする ・地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする |
| 5 | ・我が国の産業の発展に関心をもつようにする ・環境の保全の重要性について関心を深めるようにするとともに、国土に対する愛情を育てるようにする |
| 6 | ・我が国の歴史や伝統を大切に、国を愛する心情を育てるようにする ・平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きていくことが大切であることを自覚できるようにする |

表4 中学校の各分野における態度目標

| 分野 | 目 標 |
|-----|--|
| 地 理 | ・地理的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する態度を育てる |
| 歴 史 | ・我が国の歴史に対する愛情を深め、国民としての自覚を育てる ・国家・社会及び文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を、尊重する態度を育てる ・国際協調の精神を養う ・様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する態度を育てる |
| 公 民 | ・国民主権を担う公民として必要な基礎的教養を培う ・社会の諸問題に着目させ、自ら考えようとする態度を育てる ・自国を愛し、その平和と繁栄を図ることが大切であることを自覚させる ・事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する態度を育てる |

態度とは自覚をもつ、愛情をもつ、関心をもつことなどであるが、これらは、理解とかかわって初めて成り立つものである。対象と深くかかわり理解していくことによって、自覚や関心をもつようになり、愛情、心情が育っていくものである。

(3)「能力」に関する基礎・基本

学習指導要領に挙げられている社会科の能力には、社会的な思考力、判断力、観察力、資料活用力表現力がある。

表5 小学校各学年における能力目標

| 学 年 | 目 標 |
|-----|--|
| 3・4 | ・地域における社会的事象を観察、調査し、地図や各種の具体的な資料を効果的に活用し、調べたことを表現するとともに、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力を育てるようにする |
| 5 | ・社会的事象を具体的に調査し、地図、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、調べたことを表現するとともに、社会的事象の意味について考える力を育てるようにする |
| 6 | ・社会的事象を具体的に調査し、地図、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、調べたことを表現するとともに、社会的事象の意味をより広い視野から考える力を育てるようにする |

表6 中学校の各分野における能力目標

| 分野 | 目 標 |
|-----|---|
| 地 理 | ・地理的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力を育てる |
| 歴 史 | ・様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力を育てる |
| 公 民 | ・様々な資料を適切に収集、選択して多面的・多角的に考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する能力を育てる |

これらの能力を育てていくためには、その能力を育成できるような学習活動を取り入れて行かなければならない。そのためにも問題解決学習を行う必要がある。

5 調べて考える力を身に付けるために

社会科の学習指導において、地域社会や我が国の産業、国土、歴史などに対する理解と愛情を育てるとともに、社会の変化に自ら対応する能力や態度を育成する観点から、学び方や調べ方の学習、体験的な学習、問題解決学習など、子どもたちの主体的な学習を一層重視する必要がある。社会科の基礎・基本を身に付けるために、その方法として、調べて考える学習が重要であるが、その際には、何のために何を調べるかが大切である。また、どのような内容について調べることで、どのような力を身に付けさせようとしているのかを基礎・基本に立ち返って、十分吟味する必要がある。また本研究会議では、「自らが考える学習」を自らが知識として獲得する、学びの学習として位置付けた。

調べて考える力を身に付けさせるための重要な点は、まず教師が、「何を調べて、何を考えさせるか」吟味しておくという点である。「何を調べさせるか」は、事例や対象の中で取り上げるべき事実である。また「何を考えさせるか」は、子どもたちに考えさせる中身であり、それは特色や働き、役割などの概念や意味、傾向性である。

そして次に、子どもたち自らの問題意識に基づく、調べて考える学習が成立するかどうかであるが、そのためには、教師が子どもたちに対して、「なぜそれを調べるのか」(動機や目的)「何を調べるの

か」(対象)、「どのようにして調べるのか」(方法)をしっかりと確認をしておかなければならない。それによって、同時に子どもたちの「社会的事象への関心・意欲・態度」や「社会的な思考・判断」を見取ることができる。

次に子どもたちが自分の力で観察、調査した資料を的確に読み取り、追究、解決していく力が身に付くようにするためには、情報収集、分析、加工、整理、解釈する力を育てなくてはならない。それらを見取る観点としては、「観察・資料活用の技能・表現」と「社会的な思考・判断」がある。

さらに次の段階として、調べた事実を手がかりとして、そこから何が言えるのかを考える力(互いの見方、考え方を磨き合う力)である。これについては、「社会的な思考・判断」と「社会的事象についての知識・理解」で評価することができる。

6 調べて考えることと分かる授業

「分かる」とはどのようなことか、本研究会議では次のように定義した。子どもたちは、「～が分かった」、「～ができるようになった」というが、「分かる」とは、条件をつなげてみることである。例えば、事実と事実をつなげたり、条件と条件をつなげたり、過去の経験をつなげて説明ができたときに思考力が働いたことになる。過去の経験を再構成したり、経験を用いたりして、新しい問題解決に生かしていく。それに気づかない子どもに対して、教師が問いかけたり、資料を提示したり、過去の経験と結びつけるような作業をすることで、子どもたちが「分かる」のである。「分かる」ためには、調べて考えなければならない。そして子どもたちは問題が解決した時、そのことを自分の言葉で説明することができるようになる。これこそ社会科が育てようとしている、公民的資質の基礎となるのである。このようにして子どもたちが自らの学習活動の中で、自ら獲得した知識や技能は、子どもたち自身が自由に活用できるものであり、時間の経過とともに簡単に失われるものではない。生きる力につながるものである。子どもたちが思考を繰り返すことで、「ああ、そうなのか」と納得してこそ、真の意味での「分かる」ことにつながる。

教師が子どもたちに「分かる授業」を展開するためには、教師の視点として、子どもたちの興味や関心、つまずきの実態を把握する必要がある。そして、子どもたちが納得して、日常生活の中の実践に生かせるものにしていかなくてはならない。

7 授業の実際と考察

(1) 検証授業 A 小学校6 学年 「旧東海道を歩こう」

この単元でおさえたい基礎・基本

表7 この単元で押さえたい基礎・基本

| | |
|------------|---|
| ア 調べること | ・江戸幕府の始まり、大名行列、鎖国、歌舞伎や浮世絵、国学や蘭学 |
| イ 理解させたい内容 | ・身分制度が確立し、武士による政治が安定したこと ・町人の文化が栄え、新しい学問が起こったこと |
| ウ 育てたい態度 | ・身近な地域にある文化遺産に誇りを感じ、今後も愛着をもって意欲的に調べてみようとする態度 |
| エ 高めたい能力 | ・一つの資料から分かることを読み取り、それをもとに学習問題について考える力 ・幕府の立場、大名の立場、農民・町人の立場を理解し、その内容を総合してこの時代を考える力 |

単元目標

川崎市を横切っている旧東海道を歩いてみる活動を通して、川崎宿のあったころの世の中の様子に関心を持ち、その当時の江戸幕府の始まりや大名行列、鎖国、浮世絵や蘭学について資料や写真などを活用して調べ、身分制度が確立し武士による政治が安定したことや町人の文化が栄え、新しい学問が起こったことを説明することができる。

| 社会的事象への 関心・意欲・態度 | 社会的な思考・判断 | 観察・資料活用の技能・表現 | 社会的事象についての知識・理解 |
|---|--|---|--|
| ・川崎市を横切っている旧東海道を実際に歩いてみることに により、江戸時代の様子に関心 をもち、自ら意欲的に追究しよ うとする | ・身分制度や農民や町人の暮らし、 鎖国を調べることに より、幕府が世の中をどのように 治めようとしたのか、大名や農 民・町人はどのような思いをも っていたのか、多面的に考え説 明できる | ・絵図や地図などの資料を活用し て、幕府の大名統制の様子を具 体的に調べる ・行基の地図と伊能忠敬の地図を 見比べて、忠敬はどのような工 夫と努力をしたのか調べ、分か りやすく説明できる | ・徳川家康や家光が行った諸政策 によって、身分制度が確立し、 武士による政治が安定したこと を説明できる ・武士による政治が安定したこと により、町人の文化が栄え、新 しい学問が起こったことにつ いて説明できる |

単元について

この単元では、「江戸幕府の始まり」「大名行列」「鎖国」の三つの歴史的な事象を調べ、「身分制度が確立し武士による政治が安定したこと」をおさえ、さらに「歌舞伎や浮世絵」「国学や蘭学」を調べることに
により、「町人の文化が栄え、新しい学問が起こったこと」をおさえることになっている。そのため
に、例えば、大名行列や浮世絵、オランダの医学書などの資料を使って学習を展開し、それらを通
して幕府や大名、農民・町人の気持ちを想像することが、これまでは多かった。そこで、よりその
当時の人々の気持ちにせまるために、旧東海道を導入の際に取り上げ、そこを歩く人々の思いを軸
に学習を組み立てることとした。

旧東海道は、現在の六郷橋から川崎区を横切る形で横浜市へのびている。平成 13 年には、東海道宿
駅制定 400 年を、昨年は江戸開府 400 年を迎え、昨今川崎だけでなく、東海道の通るいくつかの町
でも盛り上がりを見せており、子供たちも「ただの道」という意識から「歴史ある道」という認識へ
気持ちの変化している。残念ながら、旧東海道に当時の面影はほとんどないが、道のところどころ
にある説明板や碑などから当時の様子が想像でき、子供たちの思いもよりふくらんでいくだろう。

また、この単元では、「歌舞伎と浮世絵」「国学と蘭学」のそれぞれ一方を選択してもよく、その選
択は、学習の構成の仕方によって変わってくる。まず、歌川広重の浮世絵「東海道五十三次（川崎）」
を導入として取り上げ、旧東海道を歩く活動への意欲の高まりにつなげていく。次に大名行列の様
子や通行手形に見る人々の身分の違いを考える学習を通して、幕府のとった政策をおさえ、最後
に日本全国を歩いた伊能忠敬の地図作りから、新しい学問が起こったことをおさえる構成をとる
こととした。「道」という柱を単元に通すことにより、子どもたちの関心を持続させたいと考
えた。

考察

今回の検証授業（第 7 時）では、社会的な思考・判断についての具体的評価規準を、「川崎宿の繁
栄の様子から、政治や社会が安定するにつれて、産業が発達し、人々の生活にゆとりができたこと
について、考えている。」とした。評価については、授業の最後で、「わかったことや考えたこと」を
ノートに書かせてから発表させた。その記述と発言から見取ることができた。下線は評価規準と
かかわる記述である。

表 9 着目児童の授業の振り返り

| 児童 | ワークシートへの記述 (問い 今日授業でわかったこと、考えたこと) | 評価 | 根拠 |
|------------|---|----|--|
| Mさん (男) | 農民にも少し余裕ができてきて、いい旅ができたのだろう。でも大名にとって はいい時代だったのだろうか。 | B | 大名の立場についての新たな疑問をもっている。 |
| Sさん (女) | 私は今回の勉強をして、前はお金にゆとりがなかったけど、今ではとてもお金 にゆとりが出ていて、その理由がいろいろあることを考えられる余裕が出てきて、リ サイクルなどをしたりもした。 | B | 生活のゆとりができたことを指摘できていた。「産業の発達」と 「生活のゆとり」を関連付けている。 |

| | | | |
|------------|---|---|---------------------------------|
| Uさん (男) | 江戸時代の前半は農民達が苦しんでいて、年貢を納めるのに苦労していたが、中期～後期になると田畑などの面積が増えて生活に余裕がでてきたことがわかった。幕府も初めは農民の反乱などを収めるのに大変だったけども、反乱などがなくなって日本にもやっと穏やかで平和な国になってよかったと思った。 | A | 「産業の発達」「生活のゆとり」「政治の安定」を関連付けている。 |
|------------|---|---|---------------------------------|

今回の授業では、単元の最後の第10時に振り返りの時間を設定し、子どもたちに身に付けさせたい力が身に付いたかどうかの見取りをおこなった。ここでは、社会的思考・判断の力を評価するために、「幕府、大名、農民・町人はどのような思いでこの時代を生きてきたのか。」を「幕府」「大名」「農民・町人」に分けて、子どもたちに自由に記述させた。

表10 着目児童の単元の振り返り

| 児童 | ワークシートへの記述 (問い 幕府、大名、農民・町人はどのような思いでこの時代を生きてきたのか) | 評価 | 根拠 |
|------------|---|----|--|
| Mさん (男) | 《幕府》争いのない、いい時代にした。 《大名》幕府をずるいと思っている。だけど自分を守るため。 《農民・町人》前よりは厳しくないし、金の余裕がある。 | B | 幕府や大名が政治を安定させようと努力したことや、農民や町人は、生活が苦しいながらも以前にまして生活の余裕が生まれ、自らが文化を作っていたことを、それぞれの立場を理解し考察している。 |
| Sさん (女) | 《幕府》島原の乱を起こし、キリシタンをなくそうと踏み絵などを踏ませ、そして外国の人たちはあまり信用してはいけないということをわからせた、などということから見ても偉い人々は優雅に見えても、 <u>とつても大変だった</u> と思います。 《大名》大名はいつも出かけるときはかごの中にいて、すごくたくさんの家来と一緒に旅をしていた。そして家来が多ければ多いほど位が高いとされていて、もしもそこで町人と出会ったら町人は土下座していることから偉いということが分かる。このようなことから大名は <u>いろいろな大変な決まりがあり、きっと大名もつらかった</u> と思います。 《農民・町人》この人たちは、江戸時代の後半にかけて、とても <u>優雅な生活をしていました</u> 。だから <u>東海道を利用した旅に出てみたり</u> 、日本が <u>穏やかになりました</u> 。なので <u>きっとこの人たちはとっても楽しみながら東海道を歩いた</u> と思います。それから川崎には万年屋の奈良茶飯がすごく人気がありました。 | B | 幕府や大名が政治を安定させようと努力したことや、農民や町人は、生活が苦しいながらも以前にまして生活の余裕が生まれ、自らが文化を作っていたことを、それぞれの立場を理解し考察している。 |
| Uさん (男) | 《幕府》土農工商などの階級をはっきりと決め、完全に区別し、巧みな方法で大名たちの勢力をあげないようにし、農民たちに厳しくも年貢を一定量納めさせていく。また、キリスト教の対策などや関所を作って国の安全を図っていて、 <u>幕府は完全な争いのなく豊かな国にすることを心がけていた</u> 。 《大名》参勤交代制度などで幕府に力を増すことを抑え込まれていたため、江戸時代になってからは人質などもいてつらかった。また、このままでいいのかという心もあったのだと思う。 《農民・町人》幕府の厳しい税で困っていた反面、 <u>近松門左衛門の歌舞伎や商売が盛んになったり、米もたくさん取れたり(中期～後期) 旅も楽しんでいたので意外とい世の中ではあった</u> 。 | A | 学習内容をもとに既習事項を活用しながらそれぞれの立場を総合的に関連付けて考察している。 |

社会的思考・判断の単元の評価規準は、「身分制度や農民や町人の暮らし、鎖国を調べることにより幕府が世の中をどのように治めようとしたのか、大名や農民・町人はどのような思いをもっていたのか考え、適切に判断している」とした。着目児童の他に「A」の評価とした児童は11名いた。なお、「C」の児童はいなかった。

単元の終了にあたり、学習の取組について児童に自己評価をさせた。設問に対して、の3段階で評価させ、さらに自由に記述させた。3人の着目児童の記述は以下の通りである。下線は評価規準とかかわる記述である。

表11 着目児童の自己評価

| 質問項目 | 児童 | Mさん(男) | Sさん(女) | Uさん(男) |
|--|----|----------------------|-----------------|--|
| 1 資料をじっくり見て、考えることができましたか。 (社会的な思考・判断) | | 資料を見て、発言できるようにがんばった。 | 家でも資料を見て復習しました。 | 資料集や社会の教科書にはたくさんのがのっているの、一つのことについて詳しく書かれていて、よく考えられた。 |

| | | | |
|---|--------------------|--|--|
| 2 友達の意見を聞いて、自分の意見が深まりましたか。 (社会的な思考・判断) | 友達の意見を聞いてすごく深まった。 | まあまあ少しは深まりました。 | どうして江戸中期～後期で商売ははんじょうし旅が多くなったのかというところでみんながたくさん意見を言い、自分も言おうと、どんどん意見を言えました。 |
| 3 旧東海道を歩くときどんな目的をもって歩きましたか。 (社会的事象への関心・意欲・態度) | 農民、大名はここを通っているんだな。 | 昔の人の気持ちになって歩きました。(楽しい気持ち) | 昔の人の気持ちになって(大名のように)のびのびと歩くように心がけた。 |
| 4 自分たちの街に旧東海道があることについてどう思いますか。 (社会的事象への関心・意欲・態度) | いつも通っている道なのでびっくり。 | <u>私たちの街に旧東海道があることは誇りに思えます。</u> だからこれからも歴史についてもっと勉強したいと思います。 | 江戸時代、栄えていて人がたくさん通っていることを思うと、今も昔も変わらないなあと思い、しみじみとしてしまいます。 |

それぞれの自己評価項目を観点別評価項目と関連づけて設定し、児童が授業に取り組む際のためとなるような文言とした。児童の振り返りも評価の参考とすることができるので有効である。

(2) 検証授業 B 中学校 1 学年 「私たちの町、川崎区の変ぼうを探ろう ～川崎区の現在・過去・未来をさぐる～」

この単元で押さえない基礎・基本

表 12 この単元で押さえない基礎・基本

| | |
|------------|--|
| ア 調べること | ・川崎区の「地域的特色」をとらえる 川崎区の農業、工業、交通、商業、人口、川崎市の中核地域という項目より過去から現在の変化を見つめ、区の現在の様子を調べる 区の将来像を考える |
| イ 理解させたい内容 | ・身近な地域である川崎区に対する理解を深める |
| ウ 育てたい態度 | ・身近な地域である川崎区に対する関心を深め、自分の生活の舞台である川崎区に誇りと愛着をもつとともに、未来の川崎区の姿に関心をもつ |
| エ 高めたい能力 | ・読図作業を通して、川崎区的地域的特色を読み取り、特色と社会的条件とを関連させて考えていく力 ・調査活動で収集した川崎区の「地域的特色」を、地図を使ってまとめ、そして、地形や土地利用という自然的条件と他地域とのつながりや地域内の人々の営みという社会的条件とを関連付けてまとめる表現力 |

単元目標

学校周辺の観察や調査活動を通して、自分の生活している地域(川崎区)の理解と関心を高めていく契機とするとともに、その地域的特色を捉えて川崎区の紹介ができるようにする。また、この学習を通して、地理的な見方や考え方、学習のまとめ方や発表の方法の基礎を身につける。

単元の評価規準

表 13 単元の評価規準

| 関心・意欲・態度 | 社会的な思考・判断 | 資料活用の技能・表現 | 知識・理解 |
|--|---|--|--|
| ・既存の知識および、授業での学習内容を活用しながら、学区周辺・川崎区の様子についての話し合いや調べ学習に取り組んでいる ・発表・話し合い活動で自分の意見と比較しながら、他人の意見の良さをとらえようとする | ・地形図から川崎区の地理的特色を読み取り、説明することができる ・川崎区の人口と土地利用から地理的特色を見だし、自然的社会的条件と関連付けながら、多面的・多角的に川崎区をとらえて説明できる | ・テーマに沿った川崎区に関する変ぼうを資料や統計、資料集や図書 室資料を読み取ることができる ・学区周辺および、川崎区内の地理的特色について川崎区の地形図から読み取り説明することができる | ・調査してわかったことを表現できる ・学習内容を基本として川崎区の様子についての紹介文を作成し発表できる ・地形図のきまりや読み取り方について説明できる |

単元について

この単元の学習対象は生徒が直接生活している舞台であるので、生徒の理解と関心を深めやすい。ところが、意外に自分の生活の舞台であるにもかかわらず、未知のことが多いということも言えるのではないだろうか。小学校の地域学習で得た内容を基本にして、地理的なものの見方や考え方を学びながら、多面的・多角的に川崎区をとらえ、今まで知らなかった地域の姿を再発見させ、自分の生活の場である地域に誇りをもてる生徒を育てていきたい。

考察

今回の検証授業では、社会的な思考・判断についての具体的評価規準を、「川崎区の人口と土地利用

から地理的な特色を見だし、自然的・社会的条件と関連付けながら、多面的・多角的に川崎区をとらえていくことができる」とした。評価については、単元の授業の最後で、「川崎区はどのような町なのか？紹介文を書いてみよう」をワークシートに書かせた。学習目標が達成できたかどうかについては、その記述から見取ることができた。以下の資料は生徒が第1時間目の「川崎区のイメージを考えてみよう」で記述したものと比較している。下線は評価規準とかかわる記述である。

表 14 1時間目と12時間目の紹介文との比較

| 生徒 | 1時間目の記述 | 12時間目の記述 | 評価 | 根拠 |
|--------|---|--|----|---|
| Aさん(女) | 川崎区のイメージ JR川崎駅周辺には、川崎B E、アゼリア、ルフロンなど があります。 | 川崎区はどのような町なのか？紹介文を書いてみよう JR、川崎駅周辺にはデパートが集まっています。午前10時をすぎると買い物をして人が集まってくる。このことから電車などの交通手段が楽になっていて、人が多く集まるから駅周辺に中高層建物が作られている。 <u>川崎市の人口は1960年から1965年のこの5年間で、約20万人増えた。増えたわけは、埋立地ができ工場が増えた。田畑が減って住宅地が増えたから。川崎区の工場では、食品、石油、鉄、輸送機械などをつくっている。</u> | B | 川崎の人口、土地利用の特色を把握している |
| Yさん(男) | 川崎は東京と横浜には含まれた所です。 | 川崎のとなりには、東京があります。東京と横浜を結ぶ、鉄道・道路があり、東京とつながりがある。川崎では、川崎駅周辺に中高層建物が集まっている。大きなデパートもあります。これは、交通手段が集まっているから。 <u>川崎は人口が1924年には、約5万人だったのに、それに対して、今は約120万人まで増えています。これは、埋立地ができ、工場が増えたのと、田畑が減り、住宅地が増えたことによって人口が増えています。</u> 埋立地を川崎に作った理由は、土地が広く、海上交通が便利だから。工場で作っているものは、トラック、鉄その他いろいろあります。工場は川崎の南部に多いです。道幅の広い道路が多いです。その理由は、大きいトラックが通ると、交通渋滞を減らすため、朝・夕方は、トラックなどの貨物自動車のほかに工場などに働きに行く人を乗せたバス等が通るからです。 | A | 川崎の人口、土地利用の特色を把握している |
| Iさん(男) | 川崎区には、場所ごとにその名前や、町などというもので区切られています。 また、ラ・チッタ・デッラという映画館と店が集まった場所があります。また、そのあたりには、「銀柳街」という通りがあり、ゲームセンターや服屋などたくさんの店があります。 川崎区には、駅やバス停はあるけど、空港はありません。 | 川崎区の人口は増えています。その理由は、 <u>住宅地が増え、いろいろな施設ができたから、また、東京とのつながりもあり、大きな街へと変わっていったから。でも、いいことばかりではなく、埋立地や住宅地などがたくさんできることによって、田畑や自然が失われていることも事実である。</u> このように、工場が増えていくことでここに働く人も来て増えているし、そこにいくまでの道などが必要だから、 <u>高速道路や道幅の広い道路もふえてきた。</u> | B | 川崎の人口、土地利用の特色を把握し、自然的、社会的条件と関連付けながら考察している |

このように、生徒の記述したまとめの文章から、評価規準を実現しているかどうかを見取ることが可能であり、有効であることがわかった。

学習のまとめにあたって、「20年後の川崎区をどんな町にしていきたいか」という課題で班ごとに話し合いを行い、それをもとに、各自で「市役所の人への要望」を書かせた。また、単元の最後に、自己評価をさせた。

表 15 着目生徒のワークシートの記述

| 質問項目 | 生徒 | Aさん(女) | Yさん(男) | Iさん(男) |
|---|----|---|---|---|
| 第13時 「20年後の川崎区をどんな町にしていきたいか」 1 班の意見、考え (班での話し合いの結果) | | ・家庭菜園をつくる ・事故が少なく、安心できる町 ・ポイ捨てをしている人が少なく、きれいでゴミが落ちていない町 | ・木や花を植えて自然を増やす ・工場と自然のバランスをよくする ・自然が多く、ゴミを減らして川もきれいにする 魚が住める川にする 汚れた水を捨てない ・遊べる場所がもっとある町、みんなが安心して暮らせる町 | ・事故が少なく、安心できる町 歩道をしっかり造ってほしい ・ポイ捨てをしている人が少なく、きれいでゴミが落ちていない町 |

| | | みんなが通行しやすい町 | |
|--|--|--|---|
| 2 市役所の人への要望 (各自の記述) | 私たちは、今、自分達の町の将来のことについてやっています。私は、20年後の川崎区がもっともっと自然がたくさんあったらいいなあと思います。だから、もっと道とかに草木を植えてみてはどうでしょうか。 | 今の川崎は、環境が悪いから、植物を植え、ポイ捨てを少なくするために、ごみ箱をふやしてほしい。川がきたないから、工場から汚れた水を流すのをやめてほしい。空気をきれいにするために、工場のまわりなどに、木などをたくさん植えてほしい。交通事故を減らすために、信号がついていない道路があるから、信号をつけてほしい。 | 僕は、今、自分の町についてちょっと気になることがあります。それは、歩道のことです。今、僕は、歩道がなくて車道を歩いたりしなければいけないところや道幅がせまくて、通りづらい所がたくさんあると思います。やはりこういう所があると、事故も起きやすくて危ないので、歩道がない所はつくってほしいし、せまい所はもっと広くしてほしいです。 |
| 第14時 今回の学習の自己評価をしよう (、 、 の三段階で評価) 1 地形図をよく見て、土地利用の変化や土地の様子を読み取ることができましたか。 | 土地記号など、少し読み取ることができました。でも分からないものもあったので、それは、これからどんどんおぼえたいと思います。 | 地図を見て、昔と比べると、今は自然がとても減っていた。工場は、海沿いや埋立地にあることなどが分かりました。 | 昔の地形図と現在の地形図を見比べて、どこに住宅密集地が集まっているのか、田んぼが減り、工場がどんどん増えてきていることが分かった。 |
| 2 他人の意見や考えに耳を傾けることができましたか。 | ちゃんと人の話が聞けたと思います。 | ほかの人の意見に耳を傾けることができたところか、ほかの人にまかせっきりだったことがあった。 | 自分が考えていなかったことを、他の人が言うから、しっかり、他の人の意見を聞いてなっとくできたと思う。でも、それをまとめて紙に書くことができなかったから、そこは反省したいと思います。 |
| 3 作業や話し合い活動への取り組みはどうでしたか。 | 自分から進んで、意見を出せなかったのが、残念でした。 | 本を使って調べる時に、いろいろな本から資料を集め、それを使ってうまくまとめることができました。 | 班のテーマにあった資料を図書室で見つけることができたし、それをまとめることもよくできたと思う。 |
| 4 自分の町「川崎区」の特色をつかみ、町への理解を深められましたか。 | 川崎区の良いところ、悪いところが分かりました。 | はじめて自分の町のことを調べたりして、今まで住んでいて気づかなかったことなどがたくさんありました。 | いざ、川崎区のことを聞かれると、なかなか言えなくて、意外と川崎区のことを知らないと思いました。でも、「20年後の川崎区」というテーマの時は、しっかり自分の意見を言えたから良かったです。 |

研究のまとめ

1 考察

基礎・基本を定着させるために必要な条件として、次の五点を明らかにできた。

(1) 基礎・基本を意識した単元構成の必要

基礎・基本をどれだけ意識して、単元構成をするかである。つまり、どの学習場面で、どの基礎・基本を定着させるための学習活動を行うかを、明確にしていかなければならない。単元の学習目標について、基礎・基本の定着のためにどれだけ吟味することができるかということである。そして、次の段階としては、毎時間の学習目標の中に、単元目標のどの部分を達成するものなのか、またそれを保障する学習活動が計画されているのかを十分に吟味しなければならない。そのためには、教師の教材開発力を、より向上させて行かなくてはならない。

(2) 資料の吟味の必要

どの資料を用いて、何について考えさせるのかを明確にする必要がある。限られた時間の中で学習目標を実現するためには、十分に吟味した資料を用いて、その資料から「何を読み取らせるのか」を

明確にした上で、「考える価値のあるもの」についてじっくりと考えさせ、話し合わせなくてはならない。今回の検証授業にあたっては、資料についても可能な限り検討を加えたが、それでも、必ずしも最適と思われる資料が見つからなかったり、その資料の提示の方法や、資料活用の時期やその仕方がずれたりすることによって子どもたちの反応が異なるということが分かった。

(3) 調べて考えることで「分かる」

基礎・基本は、学習問題について「調べて、考える」ことにより、「分かる」という段階に至って、より一層定着するという点である。ただ単に教えられた知識は、その時は覚えていても、時の経過とともに忘れられてしまうが、自ら獲得した(=分かった)知識や能力は子どもたちの中で自由に応用、活用され、まさに生きる力となる。つまり問題を解決した結果、分かったことを子ども自らの言葉で、みんなに説明できるということである。これは、学習単元の最後の子どもたちの振り返りのワークシートの記述などに単なる知識ではない、自分の言葉で書かれた意見や感想の中にも見て取ることができた。

(4) 子どもたちが書く活動の重要性

指導と評価の両面から授業の中で子どもたちに書く活動を位置づけることが有効である。書かせる目的としては、学習の足跡が分かるようにすること、自分の思いや考えを書かせたり、それらを集約したりすることで、子どもも教師も学習を振り返ることができる。書かせる内容は、学習問題や板書、発言の記録、本日の学習で分かったこと、感じたこと、考えたことなどを、授業ごとにノート形式でプリントを作ったり、授業の活動内容にあわせたワークシートを用意したり、振り返りカードを毎時間書かせたりすることが考えられる。これによって、子どもの状況について把握し、教師がコメントを書いて子どもと対話したり、ファイルさせたりして子どもたち自身が学習を振り返るとともに保護者にも見てもらうこともできる。

指導については、観察やまとめ、思考をさせる場面で教師から視点を与えたり、学び方を学ばせたりするという点でも、有効である。

評価については、毎時間ごとに、「授業で分かったこと、感じたこと、考えたこと」を記入させることによって、毎時間の子どもたちの変容をとらえることが可能であり、毎時間ごとの学習目標が実現できたかどうかの判断も可能となる。さらに、教師がコメントを記入し、子どもたちに返却することで、評価もできる。また、単元ごとにまとめて冊子にすることで、学習の過程を目に見える形でまとめることもできる。

(5) 単元目標の実現状況についての評価の有効性

子どもたちが調べて考え話し合った後に、単元の最後に問題を与え、それについて記述させた。今回は、小学校では、「幕府、大名、農民・町民はどのような思いでこの時代を生きてきたのか」、中学校では、「川崎区はどのような町なのか？ 紹介文を書いてみよう」という問題で行った。子どもたちに学習を振り返る機会を与え、子どもたちの記述から、単元目標の実現状況について評価をすることができた。

2 今後の課題

本研究では、単元レベルでの事例研究から子どもたちの基礎・基本の定着のために必要な条件を探る手法をとった。しかし、1年研究という時間的な制約などから、実際には小学校の6年生の歴史単元、中学校の1年生の地理的分野の事例研究しかできなかった。今後はさらに、他の学年や他の分野での事例研究を進め、事例を蓄積して、更に検討を進めていく必要があると考えている。

また、本研究で得られたことを、今後行われる他の単元の授業にも生かしていく必要がある。実施してみて初めて気付く反省点もあるので、実践を振り返っていく活動を積み重ねる必要がある。

当初は、基礎・基本が子どもたちに定着しているかを客観的に評価する方法の一つとして、問題等の作問、実施も検討していたが、実現できなかった。今後の検討課題である。

また、単元レベルだけではなく、どの単元でどのような基礎・基本を身に付けさせるのかを、小中学校全体の教育課程を見通した検討が必要である。

最後に、研究を進めるにあたり適切なご助言をいただきました先生方、研究にご支援、ご援助を下さいました学校教職員の皆様に、心より感謝し厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|---|-------|
| 佐島群巳『社会科授業づくりの基礎・基本』明治図書 | 1987年 |
| 文部省『小学校学習指導要領解説社会編』 | 1999年 |
| 文部省『中学校学習指導要領解説 - 社会編 - 』 | 1999年 |
| 洪澤文隆、小西正雄『対談・中学校教育課程 社会科の授業をどう創るか』明治図書 | 1999年 |
| 北俊夫、有田和正『対談・小学校教育課程 社会科の授業をどう創るか』明治図書 | 1999年 |
| 北俊夫『社会科の基礎・基本』明治図書 | 2002年 |
| 北俊夫『社会科の基礎・基本 - 選択学習の新しい提言』明治図書 | 2002年 |
| 北俊夫『子どもを伸ばす基礎・基本の評価』文溪堂 | 2002年 |
| 筑波大学附属小学校・社会科教育研究部『これだけは教えたい基礎・基本』図書文化社 | 2002年 |
| 国立教育政策研究所『平成13年度小中学校教育課程実施状況調査報告書 - 小学校社会 - 』 東洋館出版社 | 2003年 |
| 国立教育政策研究所『平成13年度小中学校教育課程実施状況調査報告書 - 中学校社会 - 』 ぎょうせい | 2003年 |
| 帝京中学・高等学校『平成14年度公開研究発表会 教員研究発表要旨集』 | 2003年 |
| 澁澤文隆『絶対評価成功の秘訣・運用の基本』明治図書 | 2003年 |

【指導助言者】

- | | |
|---------------------------------|-------|
| 帝京短期大学教授・東京学芸大学名誉教授 | 佐島 群巳 |
| 信州大学教授 | 洪澤 文隆 |
| 川崎市立小学校社会科教育研究会長(川崎市立南河原小学校長) | 横山 吉雄 |
| 川崎市立中学校教育研究会社会科部会長(川崎市立中野島中学校長) | 深田 肇 |
| 川崎市教育委員会学校教育部指導主事 | 小島 康宏 |
| 川崎市総合教育センター研修指導主事 | 前島 和樹 |